



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

芦名, 定道

---

CITATION:

芦名, 定道. あとがき. ティリッヒ研究 2001, 3: [1]

ISSUE DATE:

2001-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/57591>

RIGHT:

## あとがき

『ティリッヒ研究』第3号をお届けいたします。これまで本研究雑誌は、年に一回（年度末）のペースで発行されてきましたが、この号からは、年2回（3月、9月）の発行となります。研究会で研究発表し、その時点では論文化にいたらなかったものも、半年の間に書き直しを行えば、次の号に掲載することが可能になりました。その分、研究会自体の開催回数も月一回よりも増える傾向にあります。さしあたり、会の活発化という点では、喜ばしいことではありますが、これからは、掲載論文の水準をいかにして高めるのか、ということが問題になります。今後とも、皆様のご支援をいただければ幸いです。

すでにご案内のように、現在ティリッヒ研究会では、ティリッヒ『平和の神学』（ストーン編）の翻訳に取り組んでおりますが、共訳の作業は、ほぼ予定通りに進行しています。年度内の刊行が可能かは微妙なところですが、現在精力的に作業を進めつつありますので、ご期待ください。なお、この第3号に掲載の、岩城、川桐、芦名の諸論文は、この論文集『平和の神学』の内容に密接に関わっている論考です。

すでに、既刊号の「あとがき」でも指摘してきましたように、ティリッヒ研究は、これまで未刊行であった講義録 中でも、『ベルリン講義(1919-1920)』(EW.XII, 2001)は、ティリッヒの大学における研究キャリアの出発点に当たるものであり、芸術神学、宗教社会主義論、宗教哲学、学の体系論などの成立過程を知る上で、決定的な意味を持つ などの出版によって、現在きわめて活発な動きを示しています。こうした、研究動向の中で目に付くものの一つは、ティリッヒの科学論に関わる研究です。ティリッヒの生の次元論を扱った、創刊号の芦名論文、第3号の今井論文などは、こうした研究動向の一端を示すものですが、このテーマは、今後、ティリッヒの思想の現代的意義を考える上で、さらに重要になるものと思われます。関心のある方は、次の研究書や論文集も参照ください。

Michael F. Drummy, *Being and Earth: Paul Tillich's Theology of Nature*,

University Press of America, 2000

Engaging Paul Tillich's Thinking on Religion and Science,

in: *Zygon, Journal of Religion & Science*, Vol.36, Number 2, 2001 pp.255-357

研究会代表

芦名 定道